

國學院大學學術情報リポジトリ

『鬼三太残齡記』の在地性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三田, 加奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001496

『鬼三太残齡記』の在地性

三田加奈

論文要旨

源義経みなもとのかみは歴史的人物でありながら、後世さまざまに潤色、増幅された人物として、地域の文化に現れてくる。何がその力になっているのだろうか。本稿は、義経をめぐる物語の一つの『鬼三太残齡記』を取り上げ、そこに描かれる義経の人物像やその動向を、記録されたであろう岩手県南部および宮城県の地域性から読み解いていこうとするものである。

『鬼三太残齡記』は『清悦物語』とは異なり、義経は平泉の高館で自害するのではなく、身代りを置いて津軽へと脱出をはかる。これは、いわば「義経蝦夷渡航」につながる展開を示しているが、平泉ひらいづみから義経を脱出させようとする記事は『奥羽観蹟聞老志』にもみえ、それは平泉という地域の文化的な問題が

背景にあると思われる。

義経を庇護した藤原秀衡ふじわらのひでひらの遺言、鎌倉方の策略にはまった泰衡とその挙兵、そして弟忠衡の義経に対する忠義。この忠衡をめぐるエピソードこそが、『鬼三太残齡記』の特徴であり、この作品の在地の特性である。『鬼三太残齡記』は、『義経記』を越えて新しい事実を示すものではないが、地域の新たなアイデンティティを示すのが『鬼三太残齡記』といえる。

五つのキーワード… 源義経みなもとのかみ 平泉ひらいづみ 蝦夷渡航えぞとこち 藤原秀衡ふじわらのひでひら
藤原忠衡ふじわらのただひら

はじめに

源義経は歴史的人物でありながら、後世さまざまに潤色、増幅された人物として、地域の文化に現れてくる。何がその力になっていいのか、簡単に説明することは難しい。本稿はそうした関心について、義経をめぐる物語の一つである『鬼三太残齡記』を取り上げ、そこに描かれる義経の人物像やその動向を、記録された岩手県南部および宮城県の地域性から読み解いていこうとするものである。

『鬼三太残齡記』については、これまで正面きって論じられることがなかった。それにはこの作品の特殊な事情があった。『鬼三太残齡記』に先行する『清悦物語』の模倣のように考えられてきたからである。柳田國男は「東北文学の研究」の論文の「清悦物語まで」の章で、『鬼三太残齡記』は『清悦物語』の一異本と位置づけ、「いわば三馬の『忠臣蔵偏痴奇論』などと同じく、いわゆるオカシ文学の不完全なる発育に過ぎなかつた」と、パロディーの一つと見做している。『鬼三太残齡記』が一異本であるかどうかについての問題は、後ほど明らかにすることとして、この書物が岩手県南部および宮城県、すなわち旧仙台領の地域性をもとに形成されたことを、まず確認しておきたい。それがこの作品の独自性につながると考えられるからである。

以上のことを踏まえ、本稿では次の二点を明らかにする。一つは、『鬼三太残齡記』は先行する『清悦物語』と違い、義経が平泉の高館で自害するのではなく、身代りを置いて津軽へと脱出をはかることになる。いわば「義経蝦夷渡航」につながる展開を示している。『清悦物語』から『鬼三太残齡記』の成立までの間における義経関連の出版事情や時代の風潮が影響していると考えられる。しかし、それだけではなく、『鬼三太残齡記』が義経を平泉から脱出させることに独自の意義があったと思われる。義経の脱出には、この地域の歴史的な特殊事情を考える必要がある。これは地域における伝説の問題とも深く結びついている。

もう一つは、先の理由とも関わっての登場人物の造型の問題である。鎌倉方の策略を見抜けないまま、義経を庇護した父秀衡の遺言に従わなかつた泰衡は、義経のいる高館を攻める。しかし、泰衡の弟の忠衡は最期まで義経の味方をして果てる。この忠衡をめぐるエピソードこそが、『鬼三太残齡記』の独自性であるし、この作品の在地の特性といえる。それは歴史的事実を超えた『鬼三太残齡記』の主張でもあり、したがって、単なる『清悦物語』のエピソードではなく、地域のアイデンティティを示すが『鬼三太残齡記』な

のである。本稿の問題意識はここにある。

一、義経と蝦夷渡航

義経が平泉の高館で自害せず、身代りをたてて蝦夷渡航しようとした背景にはどのような事情が潜んでいるのだろうか。柳田國男が東北大学の職員に転写させた写本『鬼三太残齡記』（以下、『残齡記』という）が成城大学民俗学研究所の『諸国叢書』（第十一輯・一九九四）に載る。その解題で田中宣一は『残齡記』の特徴と蝦夷渡航について次のように述べている¹。

（：『残齡記』は、筆者補足）合戦そのものの展開も『義経記』とははなはだ異なり、いたるところで駆引きや裏切りがあったり、神仏の怒りによって災害が起こったりしている。そして結局は、義経が周囲の勧めに従って、長年の家来を見捨てるようにして津軽へとも「夷カ千嶋」へとも落ちて行つたことをにおわせるといふ、特色ある結末となっているのである。義経が蝦夷から大陸に渡って活躍したという伝説に結びつく語りであろうか。

田中は『残齡記』の義経最期の高館合戦は、『義経記』のような悲劇性を伴う物語展開ではなく、現実味のある人間の生々しい感情と行動を描いていることを指摘する。ただ、「長年の家来を見捨てるようにして」義経が蝦夷から「大陸に渡って活躍した」といふ伝説」と述べることに異論がある。『残齡記』は、蝦夷地での義経の活躍は語らないし、平泉脱出は案内人である「大蔵坊」の計画に従っただけにすぎないからである。ところで、高館落城の際、館に火をかけた鬼三太は「何トソシテ判官殿ニメクリ逢ハヤト思ヒ、単穴ノ方ヨリ忍ヒ出ツ」とあるように、義経の平泉脱出について承知し、その後を追おうとしている。このように義経の周辺の人々が、平泉脱出に協力するのはなぜであろうか。それについては、次の田中の述べるところが参考になる。

『鬼三太残齡記』は牛若丸時代からの藤原秀衡との関係をはじめ、平家の追討や頼朝から遠ざけられたことなど、義経のひととりの来し方も語るのではあるが、(中略)武蔵坊弁慶も腕力は強いが驕暴で智力乏しく、秀衡の家来などからは嫌われつづける人物として語られているのである。当時の奥州の一部には、このような語りが喝采を博す精神風土があったのであろう。²⁾

田中の「奥州の一部には、このような語りが喝采を博す精神風土があった」という指摘は重要と思われる。『残齡記』では、藤原秀衡と義経のつながりの強さを説く一方で、国衡・泰衡の高館攻めは、梶原景時の態度による義経と頼朝との不和が原因と語りながらも、弁慶や亀井の「沙汰悪しき」を直接の要因としている。義経の部下の行ないが、平泉および高館の滅亡に繋がったと説くのは注目される。ここには藤原氏一族を強く否定することができない在地の事情が伺えるからである。

その詳しい事情については後で触れることにして、その前に義経の蝦夷渡航に関する記事が、いつ頃から現われるのかについて見ておきたい。義経に関する作品や文献は多数存在するが、代表的なものを表1「義経の蝦夷渡航説の文献と作品」一覧にあげ、その義経蝦夷渡航に関わる記事を簡単に整理して紹介する。

表1 義経の蝦夷渡航説の文献と作品

種別	作者・作品名	義経関連記事
○	林羅山・鶯峯『続本朝通鑑』巻七九(寛文一〇年)	「或ハ曰フ、衣河の役、義経死せず、逃レテ蝦夷ヶ島ニ至ル、其ノ貴種今ニ存ス」
●	沢田源内「金史列将伝」(偽書『金史別本』)	義経の子孫、金國の將軍となる。
●	可足権僧正『可足記』(延宝年間)	義経(義行)の子孫、金國に有り。

△	近松門左衛門『源義経将基経』（宝永三年）	第四段、軍法将基経、第五段とある。第四段高館合戦前夜に常陸坊海存の長生を描く。義経の軍法将基経（高館合戦）、第五段で、義経は蝦夷に渡り長生殿に入る。
△	馬場信意『義経勲功記』（正徳二年）	東伯と海存の問答。義経の事実を語り、最終巻に義経蝦夷渡航、蝦夷の統領となる事にふれる。
○	水戸光圀『大日本史』巻一一八七（正徳五年）	義経の首の腐敗から、「然則義経偽死而遁去乎」と疑い、蝦夷に逃げて神となったことを記す。
●	加藤謙斎『鎌倉実記』巻一七（享保二年）	「金史列将伝」を引き、蝦夷では義経を神のように扱われていることを記す。
●	佐久間洞巖『奥羽観蹟聞老志』（享保四年）	「義経事實考附録」に、義経は平泉から蝦夷に渡り、金國に至る。（「金史列将伝」含む）
○	新井白石『蝦夷志』（享保五年）、『読史餘論』	義経は死なず、忠衡の元へ通れた。蝦夷の「ヲキクルミ」は義経「判官」のこと。
△	藤英勝『通俗義経蝦夷軍談』（明和五年）	平泉から蝦夷に渡り、蝦夷での義経の活躍を中心に描く。
●	相原友直『平泉雜記』（安永二年）	『義経勲功記』『鎌倉実記』の記事は『清悦物語』を潤色したものと述べる。
	『鬼三太残齡記』（安永一〇年）	義経は蝦夷が千嶋に向け、津軽に落ち延びる。

※表「○」は公的記事、「●」は藩史や地誌、市井の関連記事、「△」は文芸、娯楽記事として区別した。

幕府儒官の林羅山父子を中心に編纂された『続本朝通鑑』に、「或ハ曰フ、衣河の役、義経死セズ、逃レテ蝦夷ケ島ニ至ル、其ノ貴種今ニ存ス」という俗説を載せる。公の儒官によるこの俗説は、水戸光圀の命による編集の『大日本史』や徳川家の侍講・新井白石の著作に影響を与えた。この記事と前後して、金國の將軍の義鎮は義経の子孫であると記す「金史列将伝」（『金史別本』）が世を騒がせ、津軽藩の可足権僧正の『可足記』も、義経の子孫が金國の將軍になったという記事を載せている。この根拠不明の言説を、浅見綱斎（闇斎学派）の弟子である儒医の加藤謙斎が『鎌倉実記』に著し、義経の蝦夷渡航説を追隨する。一方、東北の地でも、仙台藩儒官の佐久間洞巖や同藩儒医の相原友直らが、地誌等で義経蝦夷渡航を取り上げている。特に佐久間は「義経事實考附録」に、「高館没落シ義経

金國二通ル事」と名付けて、地域に伝わる古老の話のほかに「金史列將伝」（『金史別本』）を引用する。佐久間と親しい間柄にあった相原は、逆に『金史別本』を批判的に捉え、『平泉雜記』の「弁清悦物語」に、巷説の『鎌倉実記』や軍談物の『義経勲功記』などの物語は『清悦物語』を潤色したものであるという認識を示している。これらに対し、近松門左衛門の『源義経將基経』や軍談物の『義経勲功記』、『義経蝦夷軍談』など、文芸、娯楽の世界でも義経の蝦夷渡りを話題にし、俗説の流布に加担する。そうした中で、『残齡記』は『清悦物語』に影響された物語であるが、他の中央で書かれたものとは違い、在地の物語である。

二、『奥羽観蹟聞老志』と『鬼三太残齡記』

仙台藩城下の古老の語りなどを収録した佐久間洞巖の『奥羽観蹟聞老志』（以下、『聞老志』という）十七巻の故事類に、「義経事實考附録」があり、「高館没落シ義経金國二通ル事」という記事がある。三つの段に区切られ、それぞれに注釈がつけられ、その冒頭に「説者曰近世行ハル、義経勲功記ト云書ニ義経蝦夷エ落ル事ヲ記セリ此書金二通ル、事事實大ニ異ナリ参考スヘシ」と述べられている。佐久間は義経が最終的に金國の女眞國へ遁れたという「金史列將伝」を引き、この偽書を深く信じこんでいたようである。

ところで、「義経事實考附録」の一段目は、『残齡記』と類似している。次に表2『奥羽観蹟聞老志』と『鬼三太残齡記』の対照表」を挙げ、その類似を確認する。

表2 『奥羽観蹟聞老志』と『鬼三太残齡記』の対照表（※本文の傍線、二重線は筆者による）

『奥羽観蹟聞老志』	『鬼三太残齡記』
<p>…洪水の中に背筋二十丈許なる大蛇紅の舌を出して城外を遊きわたり此日高館の邊にかきらす六郡の山川海陸皆如此にして民屋寺塔流れうする事其數しらす六郡五穀の種をたちしとかや此天氣四時計のうちに風やみ空晴て日輪はいまに未申の山端にかゝりて照し給へ共寄手ちりくになりてた、茫然としてあきれるなり夜に入て大門坊法印ひそか</p>	<p>…暫時ニ高館ノ門外ハ海ノ如ク水溢レ湧ク、寄手ノ軍勢并東軍ノ兵千人餘行衛ナク押流ス其外半死半生ノ者數多米庫帑屋民家堂塔ニ到ルマテ流レ損ル數カキリナシ、大虚時々光テ霧朦朧タリ、漲ル上ニ背筋二十丈計ナル大蛇紅ノ舌ヲ出テ遊ト諸人ノ目ニ掛ル、此天氣四時之間ニシテ風モ止ミ雨モ晴テ日輪ハ未申ノ山河ヲ照シ給フ…茫然タル躰也、</p>

に御所へ参りて申けるは世は頼なき御有様とこそ存候ひしに今日大變凡慮の外にしてまさに冥助の感する御果報頼あり今夜忍ひて御歩行あり磐手坊か郷まで退き津軽の立野へ越させ給へし…兼房申けるは只今杉目行信か申にも君蝦夷か島へ落させ給ふ共敵と心懸る人もあるへからず行信御身替りに立へし君は大門坊法印を先達として落させ給へ御運ひらく時あるへし兼房も御供とは存すれ共老脚かなひかたし兼て秀衡入道かひそかに義行へ申のこせしもかなはぬ時節に及は、蝦夷の方へ越させ給へとありし事もおもひ出させ給ひて近士七人召つれ潮手の門より忍ひ出させ給ふ

日昏夜二入テ大藏坊法印密ニ御所へ参り申ケルハ、世ハ頼ミナキ御有様ニテコソ候へ、愚按スルニ今日ノ大變是凡慮外ニシテマサニ冥助ノ感ル所御果報頼ミアリ、今夜忍ヒテ御歩行有テ是優婆塞カ霞ノ行者、磐手坊カ郷マテ御退キ、夫ヨリ津軽ノ立野へ越セ給ヘシト、最モ頼母敷見ヘケル…此上ハ御坊ノハタラキニ任スヘシト仰ケル、此概ハ兼房召テ仰合サレケレハ、珍重ノ御吉左右ニコソ唯今杉目行信カ申ニモ泰衡兄弟ノ逆心タクミ有テノ義ニ非ス、鎌倉ヲ恐レ諸卒ニ騒動セラレテ是非ナキ謀反ナレハ、君今夷カ千嶋ニ落サセ給フ、トモアレ敵トハ心掛者アルヘカラス、難面キハ辨慶ナリ、只行信ヲ御身替ニ立テ御所ハ大藏坊ヲ先達ニテ落サセ給ハ、御運開ル時有ヘシ、兼房モ御供トハ存ナカラ老脚叶ヒ難シ、…偕御供ニハ信夫小藤次熊井太郎備前平四郎伊勢三郎越後法印大宮平八大藏坊同浩然坊強力七人カラメテノ門ヨリ出給フ、乗俊案内ニテ閉ニ落サセ給ヘトモ、敢テトカムル者ナシ

高館合戦の最中に大蛇が出現したその夜、平泉の大門坊（『残齡記』では、大藏坊）は高館の御所を訪れ、義経に蝦夷へ脱出するよう進言する。大門坊は磐手坊の郷から津軽の立野への逃亡ルートを示し、高館に杉目行信の身代りを用意する。兼房も心得ており、義経を励まして大門坊に託して脱出させるといふ物語の展開は、『聞老志』『残齡記』とも同様である。また『聞老志』では、「秀衡入道かひそかに義行（義経）へ申のこせしもかなはぬ時節に及は、蝦夷の方へ越させ給へ」といふ一文を添える。平泉脱出が秀衡の遺志のように語られるのは興味深い。義経の蝦夷渡航を「秀衡」の遺志に基づくものとする根拠づけが、在地には必要であったのであろう。

なお、『聞老志』の「義経事實考附録」は、『残齡記』の成立年代を探る参考になる。『残齡記』の写本は、安永一〇年の写本を享和元年に書写したものしか現存しない。『残齡記』が『聞老志』が成立した享保年間以後に、岩手県南部および宮城県の仙台領で形成されたことを物語っている。

ところで、佐久間は、この物語に「私曰此時召連玉フ七人ノ近士誰々ナリヤ未詳杉目ノ行信ハ義行ト名乗身替リニ立兼房亀井鈴木鬼三太常陸房ハ残り留テ戦フ…」と一段下げて私見を述べている。蝦夷渡航の御供近士七人を挙げ、高館に残り合戦を続けた者は、義経

の身代りである杉目行信と兼房、亀井、鈴木、鬼三太、常陸房としている。『残齡記』や義経の蝦夷渡航に関わる在地に近い物語で、この「高館残留」組と「蝦夷渡航」組とが、どのように描かれるのか。次章で詳しく見ていきたい。

三、高館合戦の「蝦夷渡航」組と「高館残留」組

高館合戦から蝦夷渡航に続く物語を描くものに、『残齡記』『聞老志』以外に、『通俗義経蝦夷軍談』（以下、『蝦夷軍談』という）がある。『蝦夷軍談』は「蝦夷に渡った義経の蝦夷征服物語」を主題としたもので、菊池勇夫は「菅江真澄が最初に『上編義経蝦夷軍談』を書き記したのは、初めて平泉を訪ねた天明六年（一七八六）一月二〇日のこと」で、胆沢郡に滞在した時に見た物語の『清悦物語』の話題に続き、この『上編義経蝦夷軍談』の記述が見られると指摘する。さらに真澄が記した『上編義経蝦夷軍談』と藤英勝の『通俗義経蝦夷軍談』（明和五年）が同様の書であると洞察している。

以上を踏まえたうえで、『聞老志』（享保四年）、『残齡記』（安永一〇年）、『蝦夷軍談』（明和五年）から、義経の平泉脱出に向かう「蝦夷渡航」組と平泉に残って戦いを続ける「高館残留」組との人名を、表3「義経の蝦夷渡航に関わった人物一覧」に挙げる。

表3 義経の蝦夷渡航に関わった人物一覧

『聞老志』	蝦夷渡航組	高館残留組
『残齡記』	義経（義行）、大門坊（先達）、（弁慶？）、近士七人 義経、大蔵坊（先達）、信夫小藤次、熊井太郎、備前平四郎、伊勢三郎、越後法印、大宮平八、浩然坊	杉目行信、（弁慶？）、兼房、常陸房（生残*）、鈴木三郎、亀井六郎、鬼三太（生残*） 杉目行信、弁慶、常陸坊（生残*）、兼房、鈴木三郎、亀井六郎、駿河次郎、篠野源蔵、足立平太、坂田八郎、鬼三太（生残*）

『義経記』	『蝦夷軍談』
なし	義経、秋田次郎尚勝、忠衡、弁慶、依田源八兵衛弘綱、 亀井、鈴木、片岡、伊勢、駿河、黒井次郎景次、熊井、 鷲尾、備前、佐藤兄弟、民部卿頼然、鬼三太、常陸坊、 増尾、堀尾新八忠辰（秋田の郎徒）
（高館討死） 義経、武藏坊、片岡、鈴木三郎、亀井六郎、鷲尾、増尾、伊勢の三郎、備前 平四郎、十郎権頭（兼房）、喜三太 等	（平泉脱出に関係した人々） 秀衡（故人の命）、杉目行信、兼房、民部少輔基成、泰衡

「蝦夷渡航」組は、『聞老志』では義経（義行）と先達の大門口、そして近士七人となっている。『残齡記』では義経と先達の大蔵坊、近士には信夫小藤次、熊井太郎、備前平四郎、伊勢三郎、越後法印、大宮平八、浩然坊の七人がいる。『聞老志』の「近士七人」に做ったものか、法印や坊号をもつ山伏たちが加わる。『蝦夷軍談』は義経、伊勢、熊井、備前のみが『残齡記』と共通し、先達は秀衡より蝦夷渡りの命を受けていた「秋田次郎尚勝」となっている。『残齡記』に見られる山伏の名がなく、独自に従者は創られている。『蝦夷軍談』は面白さや娯楽化に傾いた創作文芸である。

一方、「高館残留」組は、『聞老志』では杉目行信、兼房、常陸房、鈴木三郎、亀井六郎、鬼三太とあり、この中で常陸房と鬼三太だけは生き残る。『残齡記』では『聞老志』で挙げられるほかに、弁慶、駿河次郎、篠野源蔵、足立平太、坂田八郎の五人が加わっている。これは『義経記』を意識した成員数といえる。『蝦夷軍談』では義経の平泉脱出を助けた人物で秀衡の舅の民部少輔基成、秀衡の息子の泰衡までも加え、通説から大きくかけ離れている。

ところで、『聞老志』は先達「大門口」、「残齡記」では平泉の大先達「大蔵坊乗俊」に、「越後法印」「浩然坊」の山伏が加わり、義経蝦夷渡航を敢行する。また、『聞老志』『残齡記』に、義経は和泉三郎忠衡が生きていれば心合わせて「羽黒辺へ籠り居ハヤ」と語る場面があり、東北南部の修験である霊山の羽黒山を話題にしている。山伏と羽黒山に忠衡を結びつけて語るところに、作品の在地性が伺える。

四、和泉三郎忠衡をめぐる在地の問題

(一) 忠衡の「和泉か城」の戦いと弁慶

二〇一一年、平泉は「仏国土（浄土）」を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として世界文化遺産に登録された。浄土思想に基づいて、その理想世界を平泉という地に求めたのが、奥州藤原氏である。三代当主の藤原秀衡は、嘉応二年に鎮守府將軍となって、京・鎌倉のいずれの権力からも距離を置いて、奥羽の支配者として独自の権勢を振るった。伝承世界では、歌人西行と対面し、義経を庇護した人物として知られる。秀衡の子には、錦戸太郎国衡、伊達次郎泰衡、和泉三郎忠衡、元吉四郎高衡などがあるが、そのうち、三男の忠衡は最期まで義経に忠義を尽くしたことで名高く、和泉ヶ城の戦いに凝集される。謡曲「錦戸」、幸若舞「和泉か城」などで知られるが、『清悦物語』や『残齡記』にもその描写が認められるので、後述する。

幸若舞「和泉か城」の発端は、秀衡が存命中に頼朝の今後の動向を見据え、息子たちに「君に不忠を至すならば、神慮の憎まれ被つて、秀平か子孫絶えぬへし」と、いずれの時も義経に忠義を果たすよう遺言し、起請文を書かせるところからはじまる。秀衡の死後、予期したとおりに、頼朝から「判官討つて参らせよ」という御判が届き、これについて兄弟らは詮議することになる。しかし、忠衡は父の秀衡の遺志を「心府」にかけ、話し合いの場から退出したので、国衡・泰衡が忠衡に対して兵を挙げることとなったという経緯を示すが、『清悦物語』『残齡記』では、頼朝の圧力による挙兵以外に、次のような理由を挙げている。

辨慶亀井弥擅ニ驕暴シテ、群臣ヲ難毀シ左右ヲ睨ミ忿テ龜大狼藉ニシテ見ル者悪口ス、家子郎等ハ陪従ト押下シ屑トモセス、此故ニ恨ミ背ク者多シ、集リ應ル族ハ稀々ニシテ、辨慶亀井カ一廉ヲウルサカル故ニ高館ノ出仕日々ニ減シテ、四代連綿タル將軍ノ嫡流ナレハ泰衡國衡カ威勢ニ偃ス者ハ倍々セリ、兄弟五人ノ中ニモ和泉三郎忠衡ハ父ニ向テ盟シ心ヲ不差、高館ノ營ヲ衛リ…

(『鬼三太残齡記』による)

弁慶と亀井が強暴で素行が悪く、郎等たちの多くは嫡子の泰衡に味方するようになっていった。そのため高館への出仕者も減るが、忠衡のみ父の遺言に違わず、義経に従う。国衡・泰衡の拳兵は、頼朝の威圧だけではなく、弁慶と亀井の一連の態度も要因のひとつと記される。亀井は鈴木三郎の弟で、弁慶ともども、熊野の出身である。「義経記」などでは忠義の臣として弁慶は冷静沈着なイメージに描かれるが、『清悦物語』『残齡記』ではどうしたものか無分別な人間に描かれる。

特に弁慶の「沙汰悪しき」描写は、高館合戦を描く幸若舞の「和泉か城」や『清悦物語』『残齡記』などそれら本文を対照しながら、さらに検討してみたい。国衡や泰衡らとの詮議後、退散した忠衡は和泉ヶ城に戻り、女房に相談する。女房は「譬自ら女の身に候とも、高館殿に参り、君の御供申すへし」として、義経に忠誠を尽くし、忠衡の意向に添うことを主張する。次にあげるのはそれにつづく場面で、三作品からの引用である。

幸若舞の「和泉か城」では、忠衡は妻との対話後に、次のように展開する。

「…定めて兄弟の人々の心中には、今夜の内、高館殿へ夜討に寄する事も候へし。見継勢を参らせむ」と、屈強の兵を廿七騎ずつて、高館殿へ参らせて、我が身はた、打ち解けて、最後を知らぬそ哀れなる。…（中略——國衡勢の襲撃——）…高館殿と和泉か城とは、その間十八町の所なれば、時の聲矢叫びの音、手に取るように聞こえければ、判官武藏を召され「和泉か城に当たつて、関の聲の聞こふるは、いかさま兄弟の者ともに、討たるゝと覚えたり。これと言ふに、義経か身の上也。急き見継」とそ仰けり。「承る」と申して、御所候卅五騎、和泉か郎等廿七騎、細駈にかゝつて、駒を速めて討つたりけり。道にて武藏言う様は、「さて暫し旁へ。此合戦と申すは、和泉の野心かあらはこそ、た、我君への心変はりの合戦也。高館の御所へ定めて討手向かふへし。押し隔てられ適ふまし。いさや御所へ返つて、君を守護し申さむ」とて途よりも引き返す。これと申すも忠衡か運の尽きたる所なり。義経が和泉ヶ城への襲撃の様子を高館から見、弁慶に加勢を指示する。弁慶は忠衡の館に向かうが、集結した助勢の兵が高館を襲うのではないかと案じて、途中で高館に引き返してくる。この弁慶の短慮が、和泉ヶ城の落城へとつながる。

同じ箇所を『清悦物語』では、

忠衡申けるハあの兄弟達の気色ニテハ今宵夜討ニせ寄らんと譜代二三十人騎を高館殿へ御助勢ニ参らする扱又女房よりの使とて武

蔵坊へ御目ニかゝり可申ハ忠衡より御加勢可參存旨候へハ御用心可被成と申上げる弁慶聞て心中ニ思様忠衡より心指尤の様なれと何と兄弟不和成共実の時ニ至りなハ兄弟ハ一味ならんと思ひける扱高館ハ御門は三重なり大手の御門の中へ忠衡よりの加勢を御入置御所の中へハ入さりけり漸く有て和泉カ城二千余り押寄たるを見て忠平よりの加勢申けるハ和泉か者二候へハ罷帰り候とて和泉カ城へ引返ス義経是を聞召和泉カ城の驛敷ハ兄弟共の軍なり早々御所勢を以て陣をはり忠衡を御所へ引き入よ仰ける弁慶陣をはりけるに此軍和泉ニ意限りあらハこそ我か君へ逆心の軍と覺たる城を出事大事そと思案して居けれハ義経武蔵ニ仰ける何とて義経か下知を背くそさらは義経出んと仰けれハ：

『清悦物語』（別本系 福島歴史資料館蔵本）では、忠衡の女房の使いが弁慶に、藤原泰衡兄弟の襲撃があることを伝えに行くが、弁慶は「兄弟ハ一味ならん」と疑つて、高館の御所に使いと助勢の兵を受け入れない。一方、義経は和泉ヶ城に国衡の軍勢が押し寄せるのを見て、弁慶に加勢を指示するが、弁慶が動かない。そして、「義経の命に従わないなら自分が行く」と激怒する。

同様の場面を『鬼三太残齡記』では、

（忠衡が妻に）阿闍梨ヲ頼ミ尼トナリ、暫ク世ノ成行ヲ見テ、後ノ世トフラヒタへ：妻ハ無隠勇婦ニテ：宵ノホト花真木幸丸カ申セシハ、國衡殿ヨリ高館殿ヲ責給フヘキ由沙汰有リ、此叟少モ早ク告ケ知セ申サント、家臣花真木ヲ召俱シ、滝津ト云強力ノ侍女ヲ連、高館へ參ル、辨慶此牀ヲ見テ、悪ク推量シテ門ヨリ内ニ不容、：忠衡一人忠義ヲハケマシ、殘四人ハ敵トナルノ道理不分明、其上此夜中ニ忠衡ハ不參シテ、女房ノミ來ル事、必ス君ヲ討ントノ謀ナルヘシト兎角分別スル処ニ和泉カ城へハ泰衡兄弟四人先忠衡ハ家ヲ亡スヘキ片意者ナレハ、物サハカシカラヌ間ニ討取レト阿倍四郎高任金剛新藤八三百騎計ニテ和泉カ城を取コムル：女房忠衡ニ後レシトヤ思ケン、燃ルカ中ニ走り入テ終ノ薪トソナリニケル

忠衡の女房と使いの「花真木幸丸」「瀧津」の二人とともに高館に知らせに行く。ここでも弁慶は「悪ク推量シ」て、女房（妻）が来て忠衡が来ないのは不審であるとして、欺いて高館を攻めるのではないかと疑つて会おうとしない間に、和泉ヶ城は襲われる。

三作品とも弁慶が判断を見誤つたことよる和泉ヶ城の落城という筋書きで、『清悦物語』では弁慶が義経の命令に従わず、『残齡記』では忠衡の女房の緊急の伝言を曲解するなど、弁慶の無分別が招いた結果に収斂させていく。

(二)『鬼三太残齡記』にみる忠衡の周辺

『残齡記』には、『清悦物語』にはない独自の趣向をこらした部分がみられる。その一つに和泉ヶ城での合戦の最中、忠衡は二人の人物に出会うことになる。

爰二國衡カ侍ニ高城源太忠衡ヲ見テ走り寄り是へ渡セ給フカヤ、イサ落サセ給へ、御供仕ラントカシコマル、忠衡志シハ悦ビヌ、乍去我々遁ルヘキ身ニ非ス、汝ハ誠ニ我烏帽子サセシユカリヨナ、此折節ノ一言神妙也、只父ノ命ヲ重シ、冥土マテ孝養ヲ忘レヌ身ナレハ、兄弟モ遺恨ナシ、汝我首ヲ取テ國衡ニサ、ケテ高名セヨトイヘハ、源太涙ヲ拭ヒ情ナキ御言ヤ、サホトマテコソ兼テモ思召ツラン恥シサヨ、御先駈仕ラント腹搔破ラントスルヲ厭ヘ留メシカ、忠衡カ臣、石橋清成ト云者忠衡ノ行衛ヲ尋テ廻リシカ、此躰ヲ見テ力ヲソヘテイサメシカ、夜ノ更ナレハ其後行衛ヲ不知ト国府寺ノ理圓物語也、彼法師ハ遠衡カ妻ノ兄秋保左衛門ト云シ人也、忠衡ニモムツマシキナリ、討手ノ勢ノ後話ニヒカヘシカ何トカ思ケン、軍中ヨリ遁レ出、発心シテ八十余マテ存命シ也、清成ハ法師トナリテ後、蓮實坊トテ洛ニ上リ人ノ知リタル道心者トナレリ、

ここに登場する武人の物語は忠衡を賞賛する立場から描かれる。最初の高城源太は敵対する国衡の家臣であるが、忠衡を逃がそうとする。しかし、かつての烏帽子親である忠衡は、自分の首を差し出そうとするのを源太は押し留め、自分が先駆けに腹を切ろうとする。そこに現れた忠義の家臣の石橋清成も切腹を押し留める。石橋清成は後に出家し、「蓮實坊」⁴を名乗る。このいきさつを記した「國府寺ノ理圓物語」の作者の秋保左衛門⁵は、泰衡側の家臣で、和泉ヶ城を攻める前に離脱して出家し、八十余まで存命したという。

これらの三人の動向は、『残齡記』の作者の独自の創作というより、近世前期のこの地域の史実に関わる部分が背景にあるようである。高城源太の高城氏は、『伊達世臣譜略』によると「高城は、當家一門留守家の分流なり。(中略)輝宗君の世、宗の字、及び高城郡高城莊十二邑を賜ひ、一家に列し、高城を以つて稱號と為す。」⁶とあり、伊達家の家臣であった。近世前期に松島町には留守家分流の高城氏の領地と紫神社(松島明神)があった。『残齡記』では、和泉ヶ城が落城し、高館に攻め入った際、北上川が洪水となり、波頭に大

蛇が出現して、関東勢が大打撃を受ける。その大蛇出現の理由を「崇り」と称し、三つの理由を説明するが、その三番目の理由として、「松嶋円福寺ノ悪僧追放ノ時、紫明神御神領マテ没収ス、是三ツ神明ノ征罰シ給フコト疑ナシ」とある。松嶋円福寺の悪僧の追放の歴史的事実は不明であるが、この時紫明神を管理していたのが高城氏である。松嶋円福寺とは現在の瑞巖寺のことで、伊達政宗が円福寺を復興させたのち、慶長年間に寺名を改めていることから、悪僧の事件は、慶長年間前後のことと思われる。なお、史実によれば、高城宗綱が「南部和賀役軍慮不然」により慶長五年に領地を没収され、「三百石一族」となる。『残齡記』の「紫明神御神領マテ没収ス」は、この事件と関わっているようである。『残齡記』の、こうした伊達輝宗や留守氏、高城氏などの史実を取り込んだ物語趣向は、地域に密着した在地の特徴を示している。

秋保左衛門の秋保氏も、名取郡秋保長袋の平則盛を祖とする伊達家の家臣である。「秋保外記」として外記の役職につき、伊達家の信頼が厚かったことが分かっている。

以上、幸若舞「和泉か城」からの一連の展開を踏まえれば高城源太、石橋清成、秋保左衛門という人物造型は、地域の史実に沿った形になっている。『残齡記』の和泉ヶ城の戦いは、こうした地域性に基づく物語仕立てで忠衡をめぐる人物群や、平泉、仙台周辺の寺社関係等との関わりをもって構想されていることがわかる。

(三) 在地にみる忠衡の姿

前述した「崇り」による北上川の洪水の理由の一つに、仙台領の鹽釜明神のことがあった。「鹽釜明神二正五九月般若経ヲ講讀スルノ前後堅ク殺生ヲ制ム、然ルニ當月始メ利府ニテ神職ノ者ヲ殺ス、此御タ、リ一ツ」と原文にある。秀衡の息子たちへの遺言の誓紙血書の起請文を「鹽釜ノ寶殿ニ納メ」たのに、その起請文に反して戦いを起こしたことも、崇りによる洪水を起こした遠因であるとする。その鹽釜明神は藤原氏と縁のある寺で、相原友直の『平泉雜記』（『南部叢書』所収）の「鹽竈鐵塔」の記事に次のように記される。

鹽竈大明神樓門ノ西ニ藤原秀衡ガ三男和泉三郎忠衡奉納ノ鐵塔アリ、扉ノ上ニ日月ヲスカス、文字高ク浮字ニ鑄付タリ。

奉寄進

文治三年七月十日和泉三郎忠衡敬白

カクノ如ク左右ノ扉ニアリ。

塩釜明神に忠衡が鉄塔を寄進したもので、塩釜明神と忠衡との関係の深さを示している。「文治三年七月十日」の日付は、和泉ヶ城攻略以前のことであり、忠衡の急難に洪水が押し寄せる理由も、この点からも考えてみるべきである。

ところで、松尾芭蕉も『奥の細道』（元禄二年五月九日）で、塩釜明神の扉に触れている。「神前に古き宝燈有り、かねの戸びらの一面に 文治三年 和泉三郎 寄進 と有り、五百年來の俤、今日の前にかひてそゝろに珍し、渠ハ有義忠孝の士也、佳命今に至りてしたハすといふ事なし、誠人能道を勤、義を守へし、名もまた是にしたかふと云り、」とある。「渠か」とは忠衡のことを言い、「有義忠孝の士」とその忠義を称える。忠衡の忠孝は塩釜明神を通じても周知のことであつたのである。

平泉の地における忠衡崇敬の念は、藤原三代のミイラが納められる中尊寺の棺に関わる伝説によつても明らかである。『陸奥風土記』¹⁰に、「金色堂と云 堂之内三檀を構へ螺細を以て飾る 弥陀観音勢至二六地藏を安置す 中檀四隅の柱は七宝を以莊嚴す 檀中に棺を納む 中は清衡 左は基衡 右は秀衡の棺也 秀衡の棺の側に和泉三郎討死之後首桶を納む」とあり、四つある棺が清衡、基衡、秀衡に加えて忠衡の首であつたという。長くそのように伝承されてきたのであろう。昭和二十五年に行われた調査で、四つ目の棺の首は「泰衡」のものと科学的に認定された¹¹。父の秀衡の遺志に従つた忠衡こそ直系にふさわしいと信じ、忠衡の首とみなされてきたのであろう。地域の人々の忠衡に寄せる思いがここに見てとれる。

兄弟間の不仲による主導権争いにも似た戦いを、頼朝の奥州征伐後の殺伐とした空気の中で、忠衡を正当とする矜持が、人々を支えてきたのかもしれない。『残齡記』はそうした人々の心を汲んで物語化してきたのであろう。決して『清悦物語』の異本ではなく、『清悦物語』以後の在地の人々の心意や主張を盛り込んだ独自の作品といえる。

おわりに

『鬼三太残齡記』は、『義経記』や『清悦物語』を始めとした義経の物語や伝説を踏まえて創られた作品である。しかし、作品には独自の主張が見られる。本稿ではそれを、身代わりを置いて平泉を脱出する、いわゆる「蝦夷渡航説」と、その脱出をうながす平泉という地域の歴史、文化の問題として取り上げた。義経の蝦夷渡航と、秀衡の遺言を守る忠衡をめぐる地域の特殊事情に関わる問題である。

『鬼三太残齡記』の平泉脱出は、佐久間洞巖の『奥羽聞老志』の古老の語りには影響を受けているが、しかし、それ以前からの「義経蝦夷渡航説」の流れにもとづいている。それらの蝦夷渡航説を整理しながら、『鬼三太残齡記』の理由を秀衡の遺言との関係においてとらえた。そのことはこの作品のアイデンティティにかかわる独自性でもある。

その背景となるのは、『鬼三太残齡記』が書かれた平泉の歴史的な事情ともかかわる。平泉周辺地域では藤原三代のなかでも鎮守府将軍で陸奥守となった「秀衡」を崇敬する傾向があり、その秀衡の遺志を守るためにも、義経を平泉で死なすわけにはいかなかった。少なくとも『鬼三太残齡記』の作者はそのように考え、義経を平泉脱出へとつなげた。一方、物語の上で泰衡の軍が高館を責める際の口実に、弁慶や亀井と、平泉勢との確執が取りざたされ、泰衡を悪人に仕立てることへの配慮がなされている。殊に弁慶の衣川の立ち往生については、自身が水に落ちて嵌ったものであり、後世に誤って伝えられたと手厳しい。

『鬼三太残齡記』では国衡・泰衡の義経への挙兵は、頼朝の圧力そのものよりも、弁慶・亀井の所業とするところにも藤原氏最良が伺える。こうした空気は、父・秀衡の遺言を忠実に守った忠衡の首が、秀衡の棺の側に納められていると信じられてきたという逸話にもうかがえる。『鬼三太残齡記』は、秀衡を中心とした在地の事情を背景に描かれた作品といえる。

〔謝辞〕 本稿を為すにあたり、國學院大學の先生方および指導教授の花部英雄先生には適切なアドバイスや助言を頂いたことを記しておく。

参考文献

- 麻原美子・北原保雄「校注」『舞の本』（新日本古典文学大系五九）岩波書店 一九九四
- 市子貞次「校注」『平家物語②』（新編日本古典文学全集四六）小学館 一九九四
- 岩手県立図書館『陸奥風土記』（岩手史叢 第十卷）岩手県文化財愛護協会 一九八三
- 太田孝太郎『南部叢書』南部図書館行会 一九二八
- 海音寺潮五郎「ほか」『義経』（書物の王国⑳）図書刊行会 二〇〇〇
- 梶原正昭「校注」『義経記』（新編日本古典文学全集六二）小学館 二〇〇〇
- 菊地勇夫『義経伝説の近世的展開——その批判的検討——』サッポロ堂書店 二〇一六
- 須田学『鬼三太残齡記』解題・翻刻』日本文学論集第二八号（大東文化大学院）二〇〇四
- 田中宣一「鬼三太残齡記」解題』『諸国叢書』第十一輯 成城大学民俗学研究所 一九九四（のち、『柳田国男・伝承の「発見」』の「第五章」『鬼三太残齡記』への関心』（岩田書院 二〇一七）に収蔵）
- 原田信男『義経伝説と為朝伝説——日本史の北と南』岩波書店 二〇一七
- 原田信男『蝦夷志 南島志』（東洋文庫）平凡社 二〇一五
- 福田晃・真鍋昌弘「編」『幸若舞曲研究 第八卷』三弥井書店 一九九四
- 三田加奈「清悦物語」における高館合戦の津波表現（付）『清悦物語』翻刻』『共立レビュー』共立女子大学大学院文学部研究科 第四十一号 二〇一三
- 森本浩雅「翻刻 架蔵本『鬼三太残齡記』」日本文学論集第三七号（大東文化大学院）二〇一三

- 1 田中宣一「『鬼三太残齡記』解題」『諸国叢書』第十一輯 成城大学民俗学研究所 一九九四（後、『柳田国男・伝承の「発見」』の「第五章 『鬼三太残齡記』への関心」（岩田書院 二〇一七）に収蔵）
 - 2 前掲田中論文。
 - 3 さらに菊池は「軍談をつくりごとのフィクションであると否定するような考えが伺われない。」と、この時点での真澄は、義経の蝦夷渡航説の真偽に触れていないことを示唆している。
 - 4 蓮實坊については不明。
 - 5 遠衡、秋保左衛門は不明だが、高城宗綱の系図から遠衡は「留守顕宗」、秋保左衛門は留守氏「村岡常継」か。
 - 6 太田亮「高城」「留守」『姓氏家系大辞典』第二卷 角川書店 一九六三
 - 7 国史大辞典編集委員会「瑞巖寺」『国史大辞典』八 吉川弘文館 一九八七
 - 8 宮城県「秋保氏」「高城」「宮城縣史」二九 一九八六
 - 9 利府は、留守氏村岡氏の領地であったという。
 - 10 留守藩家老の裔小幡家の旧蔵といわれ、水沢藩佐藤道予の執筆とみられている。
 - 11 昭和二十五年『中尊寺と藤原四代』（朝日新聞社）の報告によると、「頭や顔には多数の切創や刺創」、「眉間の左寄りに円形の二ミリほどの孔が認められこれは後頭部の同大の孔に対応し、太い鉄釘のようなものを眉間から打ち込まれたと推定される」とあって、これが「泰衡首」と判断されたものである。
- （高橋崇『奥州藤原氏』中央公論社 二〇〇二）